

♪♪♪ いい歌、いい町、いい自然 ♪♪♪

No. 479

2002. DEC

広報

あかいけ

12

特集
童謡のまち

♪このまちには歌がある

巻末特集

上野焼
400年祭

旋律の礎



河村光陽

赤池が生んだ偉大な童謡作曲家「河村光陽」。彼が残した数々の名曲は、半世紀以上経った今でも色あせることはありません。光陽が残した大きな足跡とその精神は、このふるさと赤池の地で、脈々と受け継がれているのです。

プロローグ

炭坑の町で
子どもたちが いつの間にかおぼえた 童謡
くりかえし くりかえし 歌いながら遊んだ ♪
そして ヤマは消えていった…



灰色の町は
やさしい旋律に 胸をふくらませながら
少しずつ 童謡という色をのせた ♪
胸にあかりを ぼっ・ぼっ・ぼっ… やさしく灯す歌が この町にあった ♪

名曲を残した河村光陽 たくさんの歌をつくってくれた友達
それを口ずさむみんながいた…わたしたちは 童謡の町で生きている ♪
童謡が口から口へ伝わるように
「童謡の町づくり」の想いが 心から心へ伝わっていくことを願って…

童謡のまち

そーっと、そーっと
ページを開いてみてください。
きつと聞こえてくるはずです。
童謡の町の優しいシンフォニーが……



河村光陽（本名・直則）は、明治三十年八月二三日、豊かな自然にはぐくまれた赤池町上野で産声を上げました。雄大な福智山を背景に清らかな流れをたたえる福智川、周囲に田園風景が広がるのどかな環境で育ちます。

こもりとした丘の上にある福智下宮神社、その隣に光陽の生家がありました。当時は、秋にお神楽が奉納され、たいへんにぎやかだったと言います。光陽の生家は広い屋敷だったので、お神楽のメンバーが宿泊していました。光陽はその演奏に聞き惚れ、メンパーから喜んで尺八を習いました。それが彼のメロディーやリズム感、音楽家の原点になっています。

地主だった父を早く亡くした光陽は、母ヒデノの希望で小倉師範学校に進学。そこで作曲家・藤井清水に出会い、野口雨情らのコンサートに参加するなど強い影響を受けます。卒業後の大正七年、音楽教師として隣の金田小学校に赴任。しかし光陽の胸には断ちがたい目標がありました。「シベリア鉄道でモスクワへ行きロシア国民楽派の音楽を学ぼう。できればヨーロッパにも足を伸ばしたい」。

大正九年、光陽は音楽家としての将来を託し、単身で朝鮮に渡ります。公立師範学校に勤めた後、国境近くの学校に転勤。そこは豆満江を隔て、対岸にロシアの灯りが見える場所でした。

しかしそのころ、幸か不幸か、日本人が陸路シベリア経由でモスクワへ行ける

情勢ではなくなりました。光陽はモスクワ行きを断念しソウルの学校に移ります。光陽がもし、シベリア鉄道に乗っていたら：国民楽派の音楽に刺激され、管弦楽曲への道をまっすぐに進んだかも知れません。立ちほだかつた時代の壁が運命の分岐点となり、後に光陽を童謡の世界へと導いて行きます。

ソウルでは八波武治に作曲法とヴァイオリン奏法を学んでいました。そこへ母ヒデノが「一人息子がこのまま帰らないのでは」と迎えに来ます。光陽は、東京に出ることを母に約束し日本に戻りました。

大正十三年、山田耕筰らによって日本初のシンフォニーオーケストラ「新交響楽団」が結成され、光陽はヴァイオリン奏者に応じようと上京します。しかし募集は終わっていました。光陽は奏者をおきらめ、学習研究のため東京音楽学校選科（現東京芸大）に入學します。そこで音楽理論を学び、卒業後も二年間、中田章（和声）、榊原直（ピアノ）、藤井清水（作曲）大沼哲（管弦楽法）らの自宅で個人指導を受け、本格的基礎を学習。その間



●河村光陽（かわむらこうよう）
童謡作曲家。明治30年8月23日、上野村（現赤池町）に生まれる。かもめの水兵さん、うれしいひなまつり、グッドバイ、赤い帽子白い帽子、仲よし小道、りんごのひとりごとなど千余曲を作曲。日本童謡史に一時代を築く。昭和21年12月24日、胃潰瘍発作で急逝、享年49。

子どもの世界を知らぬ人には 本当の童謡は作り得ない

河村光陽

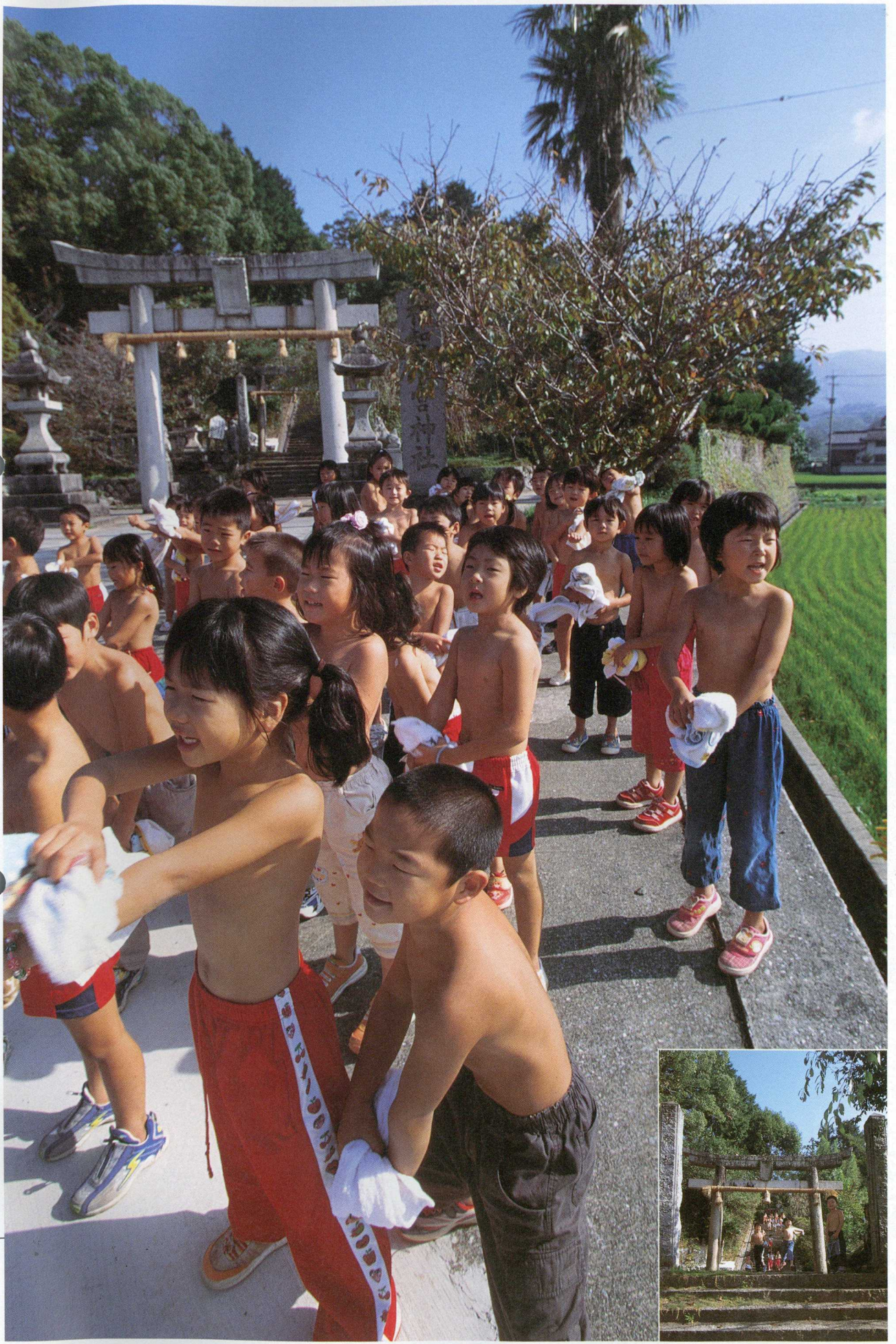
●河村光陽生誕地記念碑
河村光陽生家の隣、福智下宮神社境内の鳥居のそばに建つ。昭和60年、河村光陽生誕90年を記念して建てられた。このとき「ふるさと赤池町の童謡集」として、ふる里を歌った9曲とみんなが知っている8曲を収録したカセットテープを作成。長女の河村順子さんが監修した。



長女順子、次女陽子が生まれますが、就職はせず学習専念の四年間を過ごしました。「別テーブルで読書をしながらの食事でした」と妻・都根美は語っています。三女博子が誕生した昭和四年、光陽は東京の竹早小学校に教師として復職。すでに昭和三年から自宅でヴァイオリンと歌を教えるはじめていた光陽は、子どもたち（クロイツ少女会、後の子鳩会）を伴って、NHK出演やコロンビアレコードの吹き込みなどで多忙になります。光陽の童謡作曲が始まったのはそのころでした。

光陽は子どもの実生活をうたった武内俊子やサトウハチローらと出会い、美しい詩を日本旋律にのせていきます。光陽が童謡を作曲するうえで最も大切にしていたのが、子どもたちの息づかいや遊びのリズムでした。彼は著書にこう記しています「子どもの世界を知らぬ人には本当の童謡は作り得ない」と…。（敬称略）

♪第1楽章 旋律の礎 作曲の原点



福智下宮神社の参道入り口で、元氣な童謡にあわせて乾布摩擦に励む上野保育園児。右側に広がる田んぼに河村光陽の生家があった。「あのころ村で絹物を着ていたのは河村さんの家だけだった」というほど、代々地主を勤める裕福な家庭に生まれた。上野の豊かな自然と神社から聞こえてくるお神楽の音色が光陽作曲の原点になっている。



童謡のまち

赤池町上野天郷青年の家入口にある記念碑。森戸辰男元文相揮ごうによる「童謡一路」の文字は、駒込吉祥寺と同じもの。昭和41年に建てられ、台座は上野焼で囲われている。

●河村順子さん (かわむらじゅんこ)

ソプラノ歌手。河村光陽の長女、大正14年生まれ。現在、秋草学園専門学校客員教授。5歳で初舞台に立ち、6歳でレコードの吹き込み、NHKに出演する。昭和10年、父の曲「うれしいひなまつり」、昭和12年「かもめの水兵さん」をレコードで創唱。戦後の童謡歌手で最高の人気を得る。昭和25年・武蔵野音楽学校声楽科卒。新人才ペラ「カルメン」のミカエラ役で成人後デビュー。その後、独唱者、児童合唱団(子鳩会)指導者として2千数百曲のレコード吹き込みを行う。昭和38年・欧州留学から帰国。昭和41年～平成8年・中村学園大学助教授・千葉敬愛短大名誉教授。現在、介護福祉学生を指導するかわら、音楽療法、福祉音楽講師として活躍中。平成14年「古賀政男音楽博物館・殿堂」で歌手として顕彰される。



「河村順子六十周年記念コンサート」より(平成三年)

作品の特徴は、姉妹三人とも気づいていましたが、年齢を重ねてから、よく理解しました。父が風光明媚な上野村を想定した曲「山寺」は興国寺、「船頭さん」は彦山川、「お祭りさん」は福智下宮神社、「月夜」は田園の風景。どれも私共姉妹の好きな歌です。これらの曲がふる里の皆さんに愛唱されることが、父の希望であり喜びであると思います。

いつまでも
色あせない旋律

『かもめの水兵さん』『うれしいひなまつり』をはじめ、いつまでも歌い継がれている河村童謡。その曲の中には、ふる里上野村の景色や生活風景を想定した旋律が多く残されています。

例えば、名曲として知られる「仲よし小道」。作詞者・三舌やすしは福岡県の教師でした。歌詞にもあるように、昭和初期の福岡には小さな板橋がいくつもあり、それを子どもたちが渡って遊んでいました。光陽の生家も福智川や彦山川に近く、板橋が架かっていました。同じ地方の教師であった光陽にとって、親しみ深い光景であり、共感するところが多かったようです。光陽が作曲するとき思い浮かべた上野の豊かな自然は、今も変わらず残っています。

惜しいのは光陽の早すぎた死。戦後、様々な制約もなくなり「さあ、これから」と思っていた矢先、河村光陽は持病の胃潰瘍を悪化させ、昭和二十一年十二月二四日に突然この世を去ります。享年四九。枕元にはNHK用納曲予定の四本がおかれてありました。

「童謡一路」の生涯を閉じた河村光陽。その後、赤池町は彼の精神を受け継ぎ「童謡の町」の一路を歩んでいくことになりました。そして、半世紀以上の歳月が過ぎても、光陽の曲は色あせることはありません。

(敬称略)

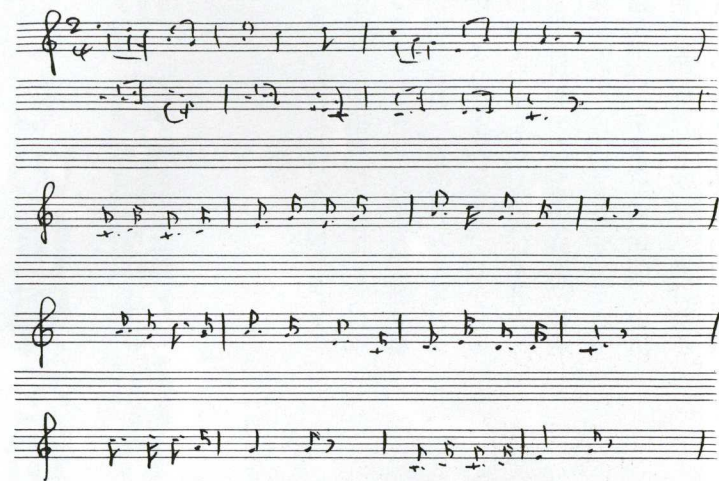
♪第1楽章 旋律の礎

童謡一路



東京都文京区駒込吉祥寺の河村家墓地内にある童謡一路の碑。昭和三年の十三回忌、音楽関係者によって建てられた。吉祥寺には二宮尊徳や榎本武揚の墓もある。

赤い帽子 白い帽子 12.10.20



昭和12年「赤い帽子 白い帽子」光陽直筆の楽譜(上)と「キングレコード童謡名作選」の歌詞(右)。



光陽の息吹が宿っている

郷里の農村から生まれた父の

作品の特徴は、姉妹三人とも気づいていましたが、年齢を重ねてから、よく理解しました。父が風光明媚な上野村を想定した曲「山寺」は興国寺、「船頭さん」は彦山川、「お祭りさん」は福智下宮神社、「月夜」は田園の風景。どれも私共姉妹の好きな歌です。これらの曲がふる里の皆さんに愛唱されることが、父の希望であり喜びであると思います。

昭和二十一年十二月、父は自宅で吐血後「明日起きたら……」の一言を残して、翌朝息をひきとりました。私は二十歳、妹の陽子十八歳、博子十六歳、陽子だけが武蔵野音楽学校に入学済みで、病氣療養中の私と博子は父の没後、音大に入学しました。明治生まれの父は私共には家庭内の話しか残しませんでした。父の生前のことを語り、教えてくださったのは父の友人達でした。一例を挙げると昭和四十二年、故・小松清芸大教授の計らいにより、私は文部省ユネスコ委派遣でベルギーの「民族音楽国際会議」に出席しました。そこで民族音楽の大切さを学び、それが父の作品にもそのまま連なることを知りました。

父の思い出

河村順子



光陽と順子(中央)昭和7年・ポツボの会